

派遣者番号	30K13	氏名	橋本 千里
研究主題 —副主題—	児童の分かり方の特性を生かした授業分析フィードバックの効果と活用		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	鶴巻 景子
所属校	葛飾区立柴又小学校	校長	木間 東平

キーワード：授業分析 認知特性 OJT

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

文部科学省よりインクルーシブ教育の理念が示され、通常の学級においても知的な発達の遅れがないものの発達障害の可能性のある児童生徒への配慮が求められている。また、東京都の教育課題に対して対応するための具体的な項目においても、障害のある児童生徒の多様なニーズへの対応が挙げられている。一方で学級担任は日々の授業準備、発生した課題への対応、校務分掌などの業務に追われ、自分自身の実践を振り返る時間を確保することや指導について客観的に見合う機会を設けることが難しい現状がある。一人一人の教員の資質向上を学校全体で高めていくために、東京都教育委員会は「OJT ガイドライン～学校におけるOJTの実践～改訂版」(平成22年3月)を策定した。様々な職務のうち、日々の授業を教員が相互に目的や視点を明確にもち、見合うことは指導力の向上となる。特にOJTを活用した特別な教育的支援の力の育成は急務である。「東京都公立学校の校長・副校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定について」では、特に主幹教諭・主任教諭といった経験年数9年目以上の教員は、児童の実態把握やニーズに即した指導・支援の観点から若手教員の育成に携わることが求められている。この充実期の教員が行う具体性を伴う指導は、指導改善の大きな力となる。

そこで本研究を通して、特別支援教育の専門性を取り入れた授業観察の視点（「児童一人一人の分かり方の特性」に着目した視点）から授業分析をし、授業者へフィードバックすることで指導力の向上となるOJTの有効な活用の仕方を構築する。

事例研究では、授業観察・記録、分析、授業者へのフィードバックを通して検証することにより、教員が自らの指導特性をつかみ、特別な教育的支援からの授業改善の視点をもって指導改善することを目的とする。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 基礎研究

藤田(2000)は、認知処理様式には、継次処理様式と同時処理様式があり、両者にアンバランスのある子供の場合には、その子供の得意な処理様式に訴える指導様式を生かした指導の手だてが必要であると述べている。この情報処理の手段を足がかりに研究された、平成28年度の東京都教職員研修センターの教育研究課題「子供一人一人の『分かり方の特性』を生かした指導法に関する研究」の成果である「情報を知覚する手段」を授業分析の視点として活用する。教師の指導を①聴覚優位を生かした手だて②言語視覚優位を生かした手だて③象形視覚優位を活かした手だて④体感覚優位を生かした指導の手だての四つの視点で分類する。

(2) 特別な教育的支援における実態調査

教師の児童の実態の捉え方、特別な支援が必要な児童への対応の実際、実際に行っている支援とその支援に対する意識を明らかにすることを目的とし、A区内公立小学校・通常学級担任へのアンケート調査を行った。

表1 担任の支援に対する意識

項目	同意 人(%)	若干 人(%)	どちらでもない 人(%)
板書を構造化し、授業内容がわかるようにする	82(49)	36(21)	50(30)
学習内容をノート等に文章化し、振り返りができるようにする	72(43)	18(10)	78(47)
授業内でICT機器を活用する	64(38)	32(19)	72(43)
説明の際、絵や写真を効果的に活用する	64(38)	12(7)	92(55)
理解度や学習の進捗を数値や段階で表す	64(38)	18(10)	86(51)
授業中の児童の態度や成果を即時評価する	68(40)	41(25)	59(35)
活動内容や場面の切り替えを声の大きさや効果音などで知らせる	64(38)	18(10)	86(52)
話し合い活動を取り入れる	55(32)	21(13)	92(55)
具体物や半具体物を操作する活動を取り入れる	76(45)	16(9)	76(46)
動作化やロールプレイを取り入れる	68(41)	36(21)	64(38)

(3) OJTサイクルを活用した事例研究

研究方法

表2 研究方法と実施時期

期	授業観察	児童へのアンケート	担任へのインタビュー	担任へのフィードバック
第一期	授業観察開始 1度目のフィードバック	3回	5月下旬	5月中旬
第二期	教材提案 2度目のフィードバック	2～3回		8月教材提案 10月
第三期	2度目のフィードバック 最後の担任へのインタビュー	1～3回	11月下旬	12月下旬

研究対象

表3 協力学級担任について

	担当学年	教員経験
A主幹教諭	第2学年	34年
B教諭	第4学年	5年
C教諭	第5学年	8年

3 研究の結果

授業分析とフィードバック

表4 第一期、第二期におけるA主幹教諭の支援の分類と発言内容の8つの役割の発生回数(回)

	聴覚優位	言語視覚優位	象形視覚優位	体感覚優位	1.説明・指示	2.注意・示唆	3.注意・示唆	4.問いかけ	5.促し	6.個別	7.確認	8.確認の返答
第一期 5月14日 算数	9	10	3	8	29	7	0	6	0	4	1	1
5月14日 国語	15	2	3	2	23	7	1	5	1	11	4	2
第二期 6月13日 算数	9	8	11	8	26	10	0	21	22	3	16	2
6月13日 国語	22	4	11	9	39	33	2	20	21	2	31	1
第三期 7月13日 算数	9	15	8	2	38	26	1	19	9	2	48	0

第一期の授業を見直し、どの担任もどの授業でも聴覚優位な支援が多いことが分かった。そのため教師の発言内容を分類することで、無意識の言葉が聴覚優位な支援として意識してできるようになると考え、第二期のフィードバックでは新たに、八つの役割で分類することにした。表4からA指導教諭は、どの学習にも、四つの支援がバランスよく含まれている。体感覚優位の手だてで、手遊びやリズム表現を国語や算数の学習の中でも取り入れている。聴覚優位の支援の中で多くを占めるのが、「肯定的な言葉掛けを行うことにより支援を図る」「意欲が続くように口頭で励ます」であった。言語視覚優位では、ICTを活用し、教科書やワークシートなどの注目させたい部分を示す、指示したことを箇条書きにして示すことが多かった。象形視覚優位は、主に教科書の絵や図に注目させ探させる手だてで、情報を色で分類する手だてが多かった。

B教諭の第一期から第三期にかけての指導の変容では、賞賛・受容や問いかけが増え、説明・指示が減っていることである。言語視覚優位な手だてが増えており、それが説明・指示的な発言を減らすことにもつながっていた。図2より注意・示唆的な発言は、徐々に減り、7月の観察では0回になっていることが分かる。体感覚優位な支援と象形視覚優位な支援は5月9日の観察では0回であったが、それ以降徐々に発生回数が増えてきている。第三期における体感覚優位な支援の回数の変容は見られないが、第一期に比べ、体感覚優位な支援の方法にバリエーションをもたせるようになり内容に変化があった。

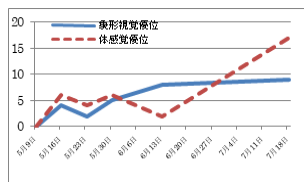


図1 B教諭の支援の出現回数変容

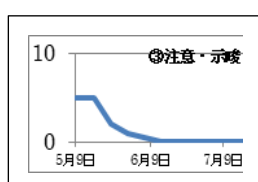


図2 B教諭の注意・示唆的な発言回数の変容

4 研究の考察

第一期と第三期のインタビューを比較すると、第一期では担任の思い中心に児童を捉え、指導を行っていたが、第三期では、自分が実

際にとった行動と四つの分かり方の特性を意識して指導を行っていた。第三期に行った担任へのインタビューから、「自分の指導の特徴に気付いた」「無意識に行っていたことを意識できた」と言う言葉や、分かり方の特性に基づく支援を考えている点からもそのことが伺える。OJT活用への可能性、自身の学びに対しての抱負、若手育成に関する視点をもつことに関する発言があったことから、それぞれの職層で自身の学び方やOJTに対する意識が生まれたと言える。

これまで無意識に行ってきた支援や指導を児童の分かり方の特性という視点から価値付けすることにつながり、指導の意識化が図れた。観察者が改善策や具体的な指導方法を示さなくても、示された数値や児童の姿から教員が自己の指導を分析的に捉え、自分で指導の工夫を行い、指導の様子が変容した。

5 今後の展望

本研究から授業分析をし、担任へのフィードバックを行うことが担任の指導や意識の変容につながったこと、分析に児童の分かり方の特性に配慮した四つの視点をを用いることで、担任の特別支援教育への意識が高まったことが分かった。特別支援教育の視点を指導に生かすには、自分の行っている指導をメタ認知することに加え、児童の実態を把握し、児童の実態から指導方法を選ぶことが必要だと考える。特別支援教育の授業分析の視点を通して、日常からコミュニケーションを取っている充実期に当たる教員と若手教員が、共に教師の指導と児童の姿を結び付け、繰り返しフィードバックをしていくことが効果的である。一方でOJTサイクルを多くの学校で実践していくために充実期の教員の若手教員指導への意識を育てることが課題であった。組織的にOJTサイクルを回すためには、管理職やミドルリーダーによる充実期の教員への働きかけが重要である。

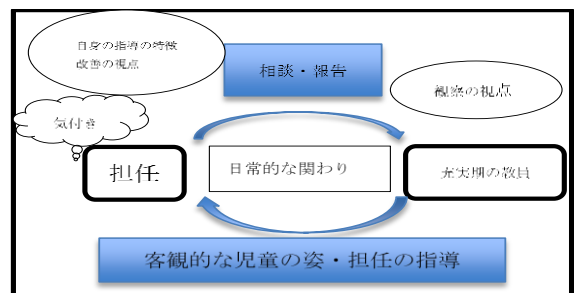


図3 授業改善OJTサイクル